

第二十八回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

佐藤 光 著

『柳宗悦とウィリアム・ブレイク 環流する「肯定の思想」』

(2015. 1. 23 東京大学出版会 刊)

佐藤 光 東京大学大学院総合文化研究科准教授

さとう ひかり 1969年(昭和44年)3月6日生まれ。47歳。大阪府大阪市出身。
英文学、比較文学

京都大学文学部英語学英米文学専攻卒業、京都大学大学院文学研究科英語学英米文学専攻博士課程修了、ロンドン大学バークベック校大学院英文学専攻博士課程修了。京都大学博士(文学)、ロンドン大学 PhD (English)。東北学院大学文学部助手、同専任講師、神戸大学文学部助教授を経て、東京大学大学院総合文化研究科准教授(比較文学比較文化研究室)。主要論文として、『The Devil's Progress: Blake, Bunyan, and *The Marriage of Heaven and Hell*』(『英文学研究』78巻2号、2001、日本英文学会第24回新人賞受賞)、『Blake, Hayley and India』(*The Reception of Blake in the Orient*, London: Continuum, 2006)、『千家元麿とウィリアム・ブレイク——無垢な『楽園の詩人』』(『揺るぎなき信念——イギリス・ロマン主義論集』、彩流社、2012) などがある。

受賞のことば

1990年9月に国立西洋美術館で開催された「ウィリアム・ブレイク展」と、時を同じくして企画された日本民藝館の「ウィリアム・ブレイク展」が、すべての始まりでした。当時私は京都大学文学部の四回生で、ブレイクについて卒業論文を書いているところでした。いそいそと上京した私は、日本民藝館の創設者として知られる柳宗悦が二十五歳の時に大著『ウィリアム・ブレイク』を著したことを知り、ブレイク研究者を志すとともに、『柳宗悦全集』を読破しようと決心しました。

四半世紀の時が流れ、「生きとし生けるものはすべて神聖である」というブレイクの言葉と、「無有好醜の願」という柳のキーワードが、古代インド哲学を起点として一直線につながり、私の最初の単著となりました。英国と日本の図書館を這い回るようにして関係資料を調査し、事実を一つ一つ積み重ねることによって、本書が誕生しました。このような地味な実証研究を評価していただきましたことを、心よりありがたく、うれしく思います。

《選考委員評》

鷺田 清一

ほんとうに美しいものは、美／醜はもちろん、善／悪の対峙からも放たれている。そうした対峙は、じつは一枚の紙の表裏のように相互に依存しあっており、だから対立する二者の一方を否定するのではなく、両者のせめぎあいの中で新しい状態が生成してゆくその様を注視することが重要だという《肯定の思想》。《民藝》の思想家であり運動家であった柳宗悦が、十八世紀英国の詩人にして画家・銅版画職人であったウィリアム・ブレイクに見いだした、生きとし生けるものすべてを慈しむその《肯定の思想》が、どのような人たちによってどのように発見され、(異なる文化の壁を超えて) どのように受け継がれ、展開されてきたかを検証する、比較文化の壮大な研究書である。

壮大というのは次のような意味である。一方に、過去のブレイク解釈を詳細に検証し、さらにそれにいくつかの新しい補助線を差し込みつつ、ブレイク像をいわば地下の深みより掘り起こす作業がある。他方には、古代インド哲学からブレイクの独自のキリスト教観へと流れ込む「西廻り」の思想の伝搬と、古代インドから仏教というかたちで中国、朝鮮を経て大乘仏教というかたちで日本に流れ込み、浄土門を生んだ「東廻り」のそれとが柳宗悦の中で合流する、その特異な出来事をまるで地球儀を西へ東へぐるぐる回すように検証する作業がある。この垂直と水平の大きな二つの軸が交叉する様、それをわたしは壮大と形容したい。

着実な比較文化の方法を基礎にしているので、そして明快なアイディアの下に起稿されているので、まるで謎解きのような詳細この上ない検証作業が続くなか、しかし途中で道に迷うことはない。そして、ブレイクのパトロンであったウィリアム・ヘイリーや大英博物館東洋部長だったローレンス・ビニョンの存在を新しい補助線として太く書き入れることで、この地球儀回しはいっそう密度の濃いものに仕上がる。

ブレイクも柳も、美術史・宗教史ではその本流に姿を現わさない。事実、彼らを支えた人、彼らの思想を伝えた人も、本流の研究者ではない。そういう周縁で地味に受け継がれた《肯定》の思考こそが、二十世紀、「世界戦争」という《対立》の時代に、多元的文化世界とその相互寛容の思想を厚く育みえたことを炙りだそうとする著者のもくろみも、堅実な手法の向こうでこれまた壮大に息吹いている。

関根 清三

本年度受賞作、佐藤光氏の『柳宗悦とウィリアム・ブレイク 環流する「肯定の思想」』は、詳細な年譜や註もついて 640 頁を超える大著である。京都大学およびロンドン大学に提出された、ブレイクをめぐる英文の博士論文を元に、傍らで続けてこられた柳研究を結び付けて、ここに日本発信の比較文化比較思想研究の大輪の花が咲いたことを慶びたい。

ブレイクは、善に対する悪、美に対する醜といった、ふつう否定的に捉えられるものも、神聖なこの世界の不可欠な構成要素として肯定した。若き日の柳は、このブレイクの根本思想に共鳴し、これを「肯定の思想」と名づけた。後年、柳は浄土真宗に傾倒し、仏があらゆる存在を慈悲の心で受け取めることに共感を示した。一世紀の時を経て、佐藤氏は柳のこのブレイク理解と仏教理解の両方が「肯定の思想」として共通することに着目した。しかもブレイクの根底にインド哲学の影響があるという柳の理解に対して批判的だった従来の通説を、ブレイクの書簡や挿画等の資料を渉猟し丹念に読み解く作業を通して見事に覆してみせた。そのことによって、インドに発する肯定の思想が、仏教として中国、朝鮮を経て東廻りに日本に流れ込んだのと同時に、ブレイクを通して西廻りに流れて来、その東西の流れが柳において一つの円環を結んだ、その間の事情を「環流」と呼んで、鮮やかに描き出すことに成功したのである。

そうした足を使っての一次資料の掘り出しも本書の魅力だが、基礎を形作るのは何と言っても、テキストの精細な読解である。就中ブレイクの主著『天国と地獄の結婚』の精密な分析を出発点として、幾重にも思想的な結論を紡ぎだして行くあたりは圧巻である。ブレイクが例えば、人と人の不和の原因となる「利己心」を制御するために「自己寂滅」という鍵概念をインド哲学の影響で設定したこと、それと共鳴しつつイエスの宗教の利己心の滅却と相互寛容の思想に強く共感したこと、そこに遡行的に立ち返って現実のキリスト教会が、規範と罰則で信者を管理する組織から自己変革しなければならないと主張したことなどを明らかにしていくのである。その際、英日のブレイク研究の多彩な歴史への目配りも怠りない。そして本書は次のように結ばれる。「二十世紀という『利己心』が衝突した戦争の時代に」、こうした思想がどこまで実効性を持つかはわからないが、「競争と征服を繰り返してきた歴史に区切りをつけて、新たに進むべき方向の一つを示している」、と。ここには、思想的歴史的研究がどこまで現代と切り結べるか、決して声高にではなく、しかし確固とした可能性を見つめて語られていることにも、評者は感銘を受けた。

黒住 真

本書は、比較文化論として示唆することとても多く、読ませていただき大変ためになりまた方向が与えられるものでした。そしてその内容は、当然ながら、タイトルの副題における「環流」また「肯定」が一体どのようなものか、何なのか、どうなるのか、ということに繋がって来ます。

柳宗悦もウィリアム・ブレイクも、私自身、従来、関心は持っても、踏み込んでいない人でした。そこに入るには、多くの時処や言葉やさらに何か意志や体験につながる「ちから」が必要です。が、そのあたり自身はまだ不十分で入れないようでした。ただそれでも、なぜ関心を持っていたかという、二人とも、通常、流れている思想や文化の思潮とは同じではない、むしろその本当の根底・次元をこそ捉えよう知ろうとしている人物とも思われ、その根のような意味はある、それは何か、と考えさせられるからです。

実際、ブレイクは、批判や戦いをします。が、そうなのではなく、何か根本的なものこそ本当に関係した人のようです。柳宗悦も、いわゆる美術や芸能や宗教の流行ではない本質的な地平をこそ捉えようとしています。だとすると、そこにある「本当の物事」は一体何なのでしょう。それがやはり、佐藤光氏が宗悦とブレイクに深く踏み込んで捉えられている「環流する「肯定の思想」」は何か、ということになる訳です。

本書の各章の詳細な資料把握や、また従来の研究との差同については、私自身はいわば外から誉める以上のことは出来ません。が、宗悦とブレイクについて佐藤氏が全体として方向づけられている道程また世界のような面は何なのでしょう。これまた詳細に議論するには手間暇かかり簡単ではありません。ただ、大きな論としては、ブレイクや宗悦が当時、対峙した「キリスト教」なるもの、また介入した「インド哲学」なるもの、それが一体何だったのか、そのことが問題になります。その際に、「対象として」のインド哲学・キリスト教を見ると共に「手前における」近代の諸思想をも見ている、と考えられます。だから、その両面を知る必要があります。

このあたりは、大きな歴史的なテーマとして少なくとも 18 世紀後半以後発生しており、ブレイクも、また追って宗悦も、更に踏み込んで文化的宗教的な遡及をしている、と言えます。指摘されていますが、ブレイクの手前にはイギリスの聖公会があったのでしょうか。宗悦の手前には国家的宗教のようなものがあったのでしょうか。

イギリスのチェスタトン (1874-1936) はキリスト教徒ですが、ブレイクを高く評価し、しかも単なる観念論者ではないキリスト教自体だ、といった考えを述べています。ブレイクは、時処を越えた「啓示」の人だったのでしょうか。宗悦の妙好人や民藝の背後には、浅川伯教 (1884-1964) ・巧 (1891-1931) の朝鮮の「器」があります。彼らには「大地」があったのでしょうか。

こうしたことが纏まってくると、相対・比較を越えた根本的な次元が出て来るかもしれません。勝手ながら私自身は、そのような大きな期待を本書から伝えられた感がありました。